

■ 提 言 ■

「小児感染免疫」への投稿の奨め

西 順一郎

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 微生物学分野

はじめに

新緑の気持ちのよい季節になりました。先日、山すその小さな小川で、今年初めてのホタルを観賞できました。本誌が発刊される頃は、暑い夏になっているかもしれません。

昨年11月から、前任の田島 剛先生に代わって、本誌の編集委員長を仰せつかりました。編集委員をはじめ理事・評議員の皆様のご協力のもと、本誌の発展に向けて微力を尽くしたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

投稿規定の改定

さて、本号から投稿規定を少し改定しましたので、この場を借りておまな変更点をお知らせいたします。まず倫理規定についてですが、臨床研究では倫理委員会で承認された課題名と承認番号を論文中に記載することを明記しました。また、症例報告でも個人情報に十分配慮し、論文投稿について患者または保護者の同意を得たことを原則として記載してもらうことになりました。個人情報保護法の改正に伴い「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」も改正されており、あらためて倫理指針の遵守をお願いします。倫理規定の基本については、本誌25巻2号の田島 剛先生の提言「倫理規定について」を今一度ご参照ください。

本誌はおもに、臨床研究に関する原著と症例報告を掲載しています。いずれも医学の進歩に貢献する論文としてその価値に変わりはありませんが、どちらの論文として投稿するのかを著者に明示してもらうことにしました。両者の境界領域に

ある論文の場合は、著者の意向を踏まえた上で、編集委員会で最終決定したいと思います。また、責任著者 (corresponding author) も明確にしてもらうことになりました。

その他、原稿の行番号の記載など細かい点を修正・追加しましたが、投稿前にチェックリストで確認し、投稿時にそれを添付してもらいます。なお、誓約書はもちろん、利益相反開示申告書にも著者全員の署名が必要です。

投稿状況と査読

審査する論文は「小児感染症・免疫ならびにこれに関連するもの」としており、臨床研究から1例報告まで幅広く受け付けています。最近の掲載論文は、原著論文と症例報告がほぼ同数です。本誌は、優れた臨床研究はもちろんですが、興味深い症例報告も積極的に審査する方針としています。ただし、症例報告はすでに多くの報告があるものや何らかの新規性が認められないものは受け付けません。

査読は、原則として編集委員または理事・評議員に依頼しており、迅速な審査をめざしています。本誌では査読を快く引き受けてくださる先生方が多く、たいへん助かっています。この場を借りて心から感謝申し上げます。審査は公正を旨として厳格に行っており、平成28年の投稿論文数42のうち審査中の論文を除いた採択率は75%でした。査読者にはご多忙の中、丁寧な審査をしていただいています。投稿者は査読者への敬意を忘れずに、査読結果に真摯にかつ丁寧に回答してほしいと思います。

わかりやすく正しい表現を

科学論文には、他の解釈ができないような正確な表現が求められます。また、専門外の方が読んでも容易に理解できる簡潔な文章が必要です。文はできるだけ短くし、言いたいことを明確に記載することが大切です。投稿前には何度も推敲し、共同著者はもちろん、それ以外の方にも読んでもらい、ぜひ意見を求めてください。またPCの画面だけではなく、実際に印刷したものを読んでみると、不適切な表現に気づくこともあります。とくに若手の会員は、少しでもわかりやすい文章にするための努力が欠かせません。科学論文の書き方に関する参考書としては、「理科系の作文技術」（木下是雄著，中公新書）をお奨めします。1981年初版の古い本ですが、今でも輝きを失っていない名著です。

投稿論文に限りませんが、以前から気になっている言葉に「にて」があります。理由はよくわかりませんが、医療関係の文書でよくみかけます。「にて」は、広辞苑によると「文語の格助詞」で、口語の「で」にあたりとあります。公文書や科学論文は口語体であり、本誌の投稿規定にも口語体で書くとして定めています。今一度、ご確認をお願い

します。

また、英語で気になる表現として、「He was diagnosed as～」があります。日本語の「彼は～と診断された」に影響されたものと思いますが、英語では本来 diagnose（診断）されるのは病気であって、人ではありません。「He received a diagnosis of～」 「～virus infection was diagnosed」 「His illness was diagnosed as～」などが適切だと思います。慣用的に使っている表現にも本来の用法とは異なるものがあります。英文要旨を書くときはご注意ください。

おわりに

多くの先輩方を差し置いて僭越なことを申しましたが、若手の会員に向けてのこととしてどうぞご容赦ください。臨床研究や症例報告を論文として発表することの意義はここで申すまでもありませんが、若手の会員が先輩の指導を仰ぎながらそれを成し遂げることは、自分自身の診療・研究のレベルを格段に上げることにつながります。論文は書き始めるまでがもつとも時間がかかるものです。まずは書けるところから書き始めてみてください。会員の皆さまの投稿をお待ちしております。

* * *